HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	緊急報告「標本レスキュー」
Author(s)	持田, 誠
Description	総合博物館へ行こう. 第12回.
Citation	きぼうの虹, 334, 7-7
Issue Date	2011-06-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46749
Type	article
File Information	mochida kibou334.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

総合博物館へ行こう

第 12 回

緊急報告「標本レスキュー」

総合博物館
資料部研究員　持田　誠



図１　腐敗が進行し本体から分離した果実を選別。日常の標本管理技術を罹災標本の修復に活かす。

標本救出へ博物館が連携

三月に発生した東日本大震災で、岩手県の陸前高田市立博物館は、壊滅的な被害を受けた。建物にはガレキが押し寄せ、津波によって多くの資料が失われたり、破壊されたりしてしまった。学芸員など職員六名も、死亡や行方不明となっている。

この博物館には、明治から昭和初期にかけて、岩手県の植物・昆虫・貝類などの自然史解明に尽力した鳥羽源蔵（一八七二～一九四六）の標本を収蔵していることで知られていた（図2）。鳥羽は札幌農学校の松村松年（一八七二～一九六〇）から昆虫学を習ったこともある、岩手を代表する博物学者である。これらの貴重な標本はどうなったのか？

震災後、現地に入った岩手県立博物館の学芸員を中心とする関係者たちは、罹災した陸前高田市立博物館から県立博物館へ残された標本を移送。いま修復処理をすれば何とか救出できる標本があることがわかり、標本の状態を確認すると共に、今後の処置を検討した。その数は植物標本約一万点、昆虫標本約百五十箱にのぼる。



図２　明治 36 年鳥羽源蔵採集のムシトリスミレの標本ラベル。標本は、その時代の生物相を実物で記録した、貴重な資料である。

数が膨大な反面、海水に浸かった標本は既に腐敗も進行しつつあり、修復作業は時間との勝負になる。そこで、岩手県立博物館から全国の学芸員に応援要請が出され、二十五箇所の博物館などが要請に応じ、「標本レスキュー」という一大作戦が始まった。

罹災標本の修復作業

北海道大学では、総合博物館と植物園が協力し、総合博物館では昆虫と植物、植物園は植物の標本を修復している。一刻を争うことに加え、学術標本の修復という、専門的な技能が求められる。

津波をかぶり、そのまま放置されていた標本は、その間に腐敗やカビが進行し、標本本体がたいへんもろくなっている（図3）。塩水と共に大量の泥をかぶって汚れもひどい。



図３　罹災した植物標本。水に浸かって放置されたことでカビや腐敗が進行。また泥をかぶって汚れている。本来、標本を保護する役割を持つ台紙も、水に浸かってふにゃふにゃになっている。さらに、花や葉が本体から分離してしまっている。

さらに、標本の採集地、採集年月日、採集者などの情報を示す「標本ラベル」は、水に浸かってインクが滲み、中には既に判読不可能となってしまった部分もある（図4）。こうした情報の無い標本は、博物館資料としての有効性が大きく低下してしまう。

一方で、津波の被害にあった標本の修復は、ほとんどの館で経験が無い。そこで、学芸員のネットワークを最大点に活用して、技術的な情報交換が活発に為され、修復の現場に活用されている。日頃から標本を扱い、博物館資料の保存に関する専門的な知識や技術を蓄積している学芸員だからこそ、そのノウハウが標本レスキューに最大限発揮されるのだ。



図４　北大植物園での標本レスキュー。植物園では 200 点の植物標本を受け入れた。標本ラベルの記載事項は本体と共に重要であり、作業にあたって記録をとる。

北大植物園では、通称「焼き肉方式」と呼ばれる標本洗浄が特徴（図5）。バーベキュー用の長方形の網で罹災標本を挟み、水を張ったコンテナに浸す。こうすることで、水を吸って台紙ごともろくなってしまった標本を、安全で速やかに洗浄することが出来る。こうしたちょっとした工夫が、修復作業の能率アップに大きく寄与するのである。

総合博物館での修復作業については、五月十八日付の北海道新聞でも紹介された他、館のホームページからもその様子を知ることができる。



図５　焼き肉の網を標本の下に敷いて作業。さらに上にも被せて上下から挟むことで、ふにゃふにゃになった標本を安全に運ぶことができる他、このまま水に浸けたり出したりできる。他館からは「焼き肉方式」と呼ばれている。